日本医史学雑誌　第56巻第3号（2010）　351–366

京都大学整形外科学教室初代教授 松岡道治の事績，業績

――第5報　松岡教授の教室員と受け入れ内地留学生――

廣谷　速人

京都市

受付：平成22年1月25日／受理：平成22年6月13日

要旨：整形外科がいまだ十分認知されていなかった時代に，京大整形外科学教室へ入局して松岡教授の指導を受け，今日の発展の基礎を作るとともに，京都，新潟，神戸，姫路，広島の各地で整形外科臨床を実践した教室員7名，および整形外科学ならびにエックス線学研修のために松岡教授が受け入れ，名古屋・東海地域の整形外科発展へ寄与した愛知県立医学専門学校在籍医師3名について，その生涯と事績を報告した．

キーワード：医学史，松岡道治，教室員，内地留学生

第1章　はじめに

明治39（1906）6月16日に助教授として整形外科学教室を京都帝国大学京都医科大学に創設し，大正3（1914）年1月5日に教授を退官した松岡道治の事績，業績はすでに報告したところである[1,2,3,4]．

本報では，松岡教授在職中にその指導を受け，教室発展の基礎を築いた教室員，および松岡教授が教室へ受け入れた内地留学生を紹介する．

第2章　教室職員（表1）

第1節　山崎傳三

山崎傳三は三重県出身で明治18（1885）年生まれ，明治35（1902）年に愛知県立医学専門学校（現・名古屋大学医学部）を卒業し[8]，卒後一年志願[9]ののち日露戦争に従軍[10]，除隊後京大整形外科初の助手に任ぜられた[8]．

明治40（1907）年5月に開催された京都医学会第四次総会に際して京都医科大学および附属医院が学会参加者に公開されたとき，“説明委員”に任命され（他科は教授，助教授が任命されていた[11]），整形外科額教室の展示品の説明に当たった[12]．

明治41（1908）年から神戸市吉田病院副院長を務めたのち，大正2（1913）年9月に神戸市神戸区（現・中央区）中山手通五丁目で外科，皮黴科を開業した[8,13]．

第2節　恒村京八（図1）

恒村京八は熊本県球磨郡郡人吉町九日町（ここのかまち）（現・熊本県人吉市九日町）の出身（私信．恒村麗子先生，平成19年4月9日並びに同5月2日）で，明治18（1885）年1月に生まれた[14,15]．私立熊本医学専門学校[16]へ進学し，明治39（1906）年10月に医業開業試験に及第[15]，同年12月に熊本医学専門学校別科を卒業した[17]．京大で皮膚科学ならびに整形外科学（助手）を学び，大正4（1915）年2月，京都市上京区聖護院町字片木原（現・左京区聖護院山王町）で開業した[14,18,19]．熊野神社[20]の客殿を譲り受けたと言われる（私信．恒村先生，同上）恒村医院は，今日なおほとんどそのままの姿で現存していて，端正な佇まいを見せている．

恒村は長女夭折の翌年（大正7〔1918〕年），

表1　松岡教授在任中の教室職員[5)]

年度	教授	助教授	講師	助手	副手[6)]・医員介補[7)]
明治39–40年		松岡道治		山崎傳三	
明治40–41年	松岡道治			恒村京八	
明治41–42年				林喜作	竹端民之輔
明治42–43年					
明治43–44年					
明治44–45年				林喜作，和辻龍太郎	
大正元–2年			林喜作	岩瀬国義	
大正2–3年[5)]					三宅坦

山崎辨榮（べんねい）聖者の唱える光明主義に感銘し，爾来念仏三昧の生涯を貫いた．すなわち，夏山と号して大正9（1920）年には京都光明会の設立に尽力するとともに，自宅二階を念仏道場として開放した．その後，京都帝大三高学生光明会（のちの京都学生光明会）を結成，さらに大正14（1925）年には私費を投じて洛西梅ケ畑に宿泊設備を持った光明修道院を建設，運営した．昭和5（1930）年には月刊「観照新聞」（昭和10〔1935〕年に「大光明」と改称）の社主となり，戦後昭和23（1948）年には機関誌『光明』の編集長に就任した[14)]．著書に『法のともしび』（上野泰男編，京都学生光明会出版，昭和20年），『墓穴の中より這い出して』（薮内宏編，京都学生光明会出版，昭和28年）などの説法集がある．

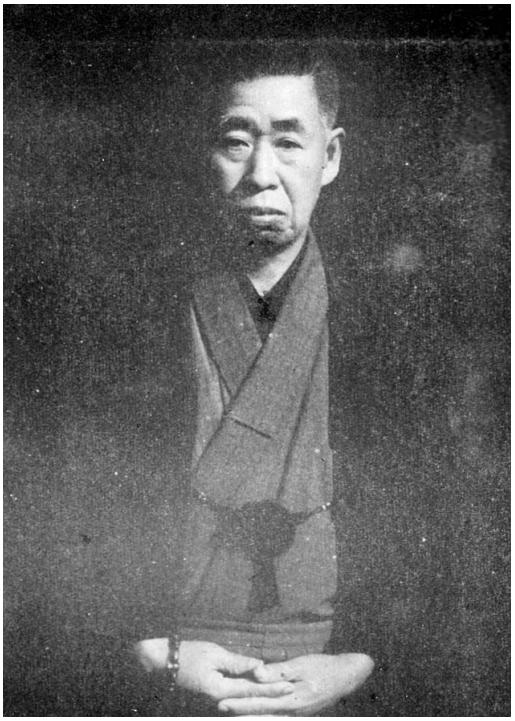

図1　恒村京八先生
昭和26年撮影[14)]

恒村は昭和35（1960）年に死去したが，昭和38（1963）年に京都学生光明会は一書[14)]を上梓して遺徳を偲び，讃えた．

第3節　林喜作（図2）

林喜作は千葉県長生（ちょうせい）郡豊田村（現・茂原市長尾）の出身[21)]で明治14（1881）年生まれ．第二高等学校大学予科第三部医科[22)]を経て京都帝国大学医科大学を明治40（1907）年に卒業した．卒後整形外科学教室へ入局して助手を務め，明治45（1912）年5月教室初の講師を委嘱された[23)]．大正3（1914）年2月医学博士を授与され[24)]，同年5月には京都府立医学専門学校講師を併任された[25)]．

松岡教授退官（大正3〔1914〕年1月）から尾崎教授就任（大正7〔1918〕年5月）までの約4年間，整形外科学教室の研究，診療，教育に当たったのち，講師を辞して京都市内で開業した[26)]．

林は開業後も先天性股関節脱臼を中心に多くの研究を日本外科学会，その他の学会に発表し，

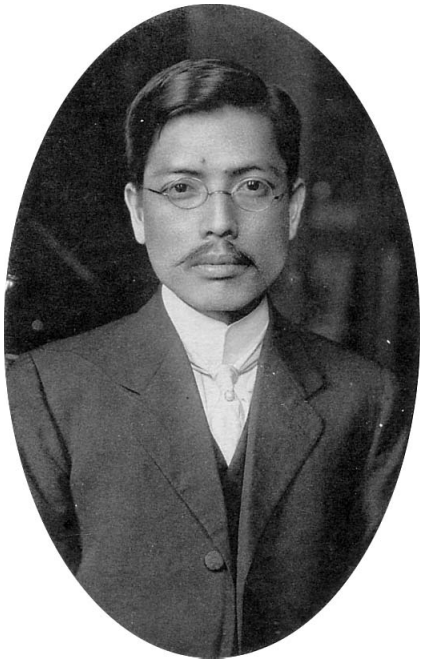

図2 林喜作先生
京都帝国大学医科大学 第十六回 卒業記念写真
大正7年7月調整（筆者蔵）

とくに新生児の先天性股関節脱臼の大部分は自然治癒することを自験例800例の観察から主張した[27,28]．昭和2（1927）年の第2回日本整形外科学会総会で宿題講演「先天性股関節脱臼」を東大高木憲次教授と共に担当し，論争したことは有名である[29]．

林については「其の名既に京都外科界を風靡するの概あり．賦性敦厚にして，恭謙礼譲あり」とその高い声望が伝えられている[30]．昭和46（1971）年12月に死去したが，林医院は今日まで2代に亘って引き継がれている．

第4節 竹端民之助

竹端民之助[31]は島根県出身で明治14（1881）年生まれ．第四高等学校第三部医科[31]を経て明治41（1907）年1月に京都帝大を卒業し[32]，京大整形外科学教室の副手を勤めたのち，高等学校以来の同級生島津眞（新潟出身）[33]の推薦で新潟県北蒲原郡新発田町（現・新発田市）の乾病院[34]へ赴任し，明治44（1911）年同地七軒町（現・五十公野（いじみの）町字七軒町）で内外科を開業した[35]．

竹端医院は，平成13（2001）年の取り壊しに際し新発田市に残る大正初期の洋風建築として建築家による調査が行なわれた[36]．

第5節 和辻龍太郎

明治16（1883）年2月兵庫県神崎郡砥堀村仁豊野（現・姫路市仁豊野町）の代々の医家に生まれ，第三高等学校第三部医科を経て[37]京都帝大を明治42（1909）年に卒業した[38,39]．卒後，京大附属医院で外科（猪子・伊藤教授．副手[40]），耳鼻咽喉科（和辻春次教授），小児科（平井毓太郎教授），整形外科（松岡道治教授．助手[41]）を研修したのち，大正2（1913）年に生家で開業した[38]．龍太郎は昭和14（1939）年に死去した[42]が，医業はその子孫によって現在も継続されている[42,43]．

和辻哲郎（1889-1960年．倫理学者，哲学者．京都帝国大学教授を経て東京帝国大学教授，文化勲章受賞）は龍太郎の実弟であり，京大耳鼻咽喉科学講座和辻春次教授は父方の叔父に当たる[42,43]．

第6節 岩瀬国義（図3）

岩瀬国義は，徳島の代々医家，岩瀬良吾[44]を父として明治18（1885）年徳島県麻植（おえ）郡学島（がくしま）村字学唐戸（現・吉野川市川島町字唐戸）に生まれた[45]．明治44（1911）年9月に金沢医学専門学校（現・金沢大学医学部）を卒業[46]したのち京大整形外科学教室へ入局，明治45（1912）年6月[47]から大正2（1913）年6月末[48]まで助手を務めたのち，徳島市出来島町一丁目にて整形外科を開業した[49,50]．「特に多くの資を要し而かも収入の尠き整形外科を撰び，昔日の仁術を実践し」たが，一方「温厚寡黙，時に豪放磊落，趣味は到って多かった」と評されている[45]．昭和45（1970）年没（私信．岩瀬禎章博士，平成18年11月24日）．

岩瀬が，明治31（1898）年に東京で開業した林曄（はじめ）に次いでわが国二番目，東京以外の土地で初めて開業した整形外科医であること[51]，岩瀬家が国義，その子の美宏と六郎，美宏の子である禎章・毅信・方人の三兄弟，さらに禎章の子である丈明と，4代に亘って引き続き整形外科医を輩出

図3　岩瀬国義先生[45]

している（私信．岩瀬博士，上記）稀な家系であることは，わが国整形外科学の歴史に特記されるべきである．

第7節　三宅坦

1. 略歴

三宅坦（ひろし）は香川県丸亀市風袋町（ふるたいまち）の出身[52]で明治23（1890）年生まれ．明治42（1909）年に東京府立第三中学校から愛知県立医学専門学校へ入学[53]，大正2（1913）年に卒業して京大整形外科学教室へ入局した[54]．

しかし大正3（1914）年12月調べの校友会名簿[55]によれば，その住所は広島市西引御堂（ひきみどう）町（現・広島市中区十日市2丁目～広瀬町）になっている．この住所は医師三宅訒（香川県出身．文久2〔1862〕年生）[56,57]と同一であり，三宅訒は年齢的に三宅坦の父であると推定できる．松岡教授は，大正3（1914）年1月の依願免官の前年秋に病を得て鎌倉で静養している[58]ので，三宅はその前後に京大を辞し，帰郷して父と共に開業していたと推定される．

2. 松岡病院での三宅坦

三宅は松岡開業（大正4〔1915〕年4月）の直後から松岡病院へ勤務したようで，大正6（1917）年の愛知県立医学専門学校校友会雑誌の「支部だより」[59]によれば，校友会大阪支部長は三宅を「松岡教授ニソノ手腕ヲ認メラレ同博士開業ニ際シ第一助手トシテ聘セラレ現ニ同院ニ其重キニ居レリ同院ヲ参観スルモノ皆其成功ニ驚カザルモノナシ」と賞賛し，同窓のなかでの外科の第一人者であると熊谷幸之輔元校長[60]へ推薦したと述べている．

松岡が何故このように三宅に目をかけたかは明らかでない．しかし他方，松岡の第一高等中学校時代の1級上[61]と東京帝国大学医科大学1年[62]の同級に三宅恒（広島県出身，慶応3〔1867〕年生まれ）という名前が名簿にあり，しかもその後の名簿にはその名前が見当たらない．三宅坦が，この夭折した（と思われる）旧友三宅恒と，出身地は異なるもののなんらかの姻戚関係にあった（亡友の甥か）ためではないかと想像することが出来る．

三宅は同窓会大阪支部の世話役を長らく務めた[63]．また昭和9（1934）年8月には，名古屋医科大学から医学博士を授与されている[64]．

妻綾子は島根県出身で明治32（1899）年の生まれ，大正11（1922）年に東京女子医学専門学校（現・東京女子医大）を卒業し，昭和12（1937）年の日本医師名簿[65]には兵庫県武庫郡住吉村花田（現・神戸市東灘区住吉宮町三丁目）開業となっていて，三宅坦の住所[66]と同一である．なお大阪での眼科病院勤務と言う履歴も残されている[67]．

3. 広島市での三宅坦

三宅は昭和12（1937）年1月に広島市鷹匠（たかじょう）町（現・中区本川（ほんかわ）町）で開業した[68]．今日死語となっている3年の「お礼奉公」（学位論文指導，通過のお礼として指示された身分を一定期間勤めること）ののち，帰郷したものと考えられる．

昭和12（1937）年に日本臨床外科医会が設立されると，三宅はその評議員となる[69]とともに活発な学会活動を行なった[70]．

さらに昭和16（1941）年策定の広島市策定防空計画の「防空業務ニ従事スヘキ医師，歯科医師，

獣医師，薬剤師，看護婦表」[71] には，三宅坦は外科，同綾子は内科として共にその名前が掲載されている．

4. 五日市町での三宅坦

三宅夫妻は昭和16（1941）年のはじめに広島市西郊の佐伯郡五日市町（現・広島市佐伯区五日市町）へ転宅した[72] が，昭和20（1945）年8月に移転開業としている記事もある[73]．いずれにせよ，同年8月6日の広島原爆投下時には直接の被爆を免れた．

しかしこの日以降，三宅夫妻は自宅に多数の患者を抱えた上に被爆患者の救護に忙殺された．すなわち県医師会などから乏しい医療材料，医療器械の提供を無理やり受け，五日市国民学校（現・広島市立五日市小学校），廿日市工業学校（現・広島県立廿日市高等学校），町役場などに急造された臨時救護所だけでなく，民家の納屋へも収容された被爆患者を，連日治療したと言う記録が残されている[74,75]．

戦後もようやく落ち着いてきた昭和24（1949）年9月の佐伯郡医師会研究会（厳島小学校〔現・宮島小学校．広島県廿日市市宮島町〕）では「先天性畸形治療の時期について」[76]，昭和26（1951）年5月の同会（宮島　錦水館．同上宮島町）では「肩胛骨骨折について」[77] の演題で，それぞれ講演している．戦後の演題名としては，まさに松岡道治直伝の面目躍如と言うべきである．

その後三宅は町公安委員長，公衆衛生組合長，広島県医師会裁定委員などの要職を歴任した[73] だけでなく，昭和26（1951）年4月から同28（1953）年7月まで五日市町長を務めた[78]．

昭和35（1960）年11月の佐伯郡医師会創立十五周年記念式で，三宅は功労者，年長者（70歳）として表彰された[79]．時の医師会長吉田繁満は，その挨拶の中で「殊に五日市町の三宅坦先生の如きは尚矍鑠として余力あり卓越した技術手腕を持たれながら，この10月20日を以って引退余生を自然を友とし晴耕雨読の境地に入られた御身分は羨望の標と云う外はありません」と述べている[80]．

なお昭和45（1970）年の佐伯郡医師会会員名簿には三宅綾子の名前は記載されているが，三宅坦の名前はない[81]．

第3章　短期留学生の受け入れ

第1節　愛知県立医学専門学校の整形外科分立

明治42（1909）年春頃，愛知県立医学専門学校では整形外科を外科から分立，独立させる議が起こり[82,83,84,85,86]，同年9月28日付で安間賢敏外科学助教諭（県立愛知病院外科第二部）[87] を京都帝国大学整形外科学教室へ派遣した[88]．派遣期間は，始め「約二ヶ月間ノ予定」とされていたが，実際は9月から12月までの3カ月間であった[89]．留学先に京大整形外科を選んだのはエックス線学の研修のためであったと，安間はのちに述べている[89③]．それを裏付けるように，安間は帰学後エックス線関連の演題を相次いで中央医学会[90] へ発表している[91]．

京大整形外科がこのような意味から留学先に選ばれたことは，松岡教授のエックス線学への深い造詣，学会での熱心な活動が，当時いかに高く評価されていたかを物語るものである．

なお愛知病院（愛知県立医学専門学校附属病院）にエックス線装置が初めて設置されたのは明治39（1906）年であって，明治41（1908）年にはさらに1台が納入されているが，当時の理学療法科の患者のうち撮影，透視のための患者は半数で（半数は治療のため），その過半数が骨部であったと言う[92]．

第2節　安間賢敏外科第三部長

愛知県は明治43（1910）年12月に安間を教諭に任じ[93]，「外科第三部」を明治44（1911）年3月に分立させて外科第三部部長に任命し[94]，同年4月（新学期）から整形外科の診療を開始せしめた[82,83,84,85,86]．

すなわち愛知県立医学専門学校整形外科は，京大，東大に次いで創立された医育機関整形外科であり「日本各医専校県立病院等の魁」[89③] であった．

安間教諭は鋭意診療に従事し，その6カ月の経験[95] を中央医学会総会へ提出しているが，その

詳細はのち[89③]に発表された．すなわち「外科第三部の患者は初め各分科で診察されたのち，当科に属すると診断された患者に限り送られてくるもので，直接に受診するものではなかった」ので，「初め1，2ヶ月は1日平均新来1名，旧来6，7名で，3・4ヶ月の後は入院も4，5名となり，十数名の外来もあって毎日ギプス手術を行うようになった」と漸次発展した．愛知県立医学専門学校整形外科がその独立性を確立するまでには，京大整形外科と同様な苦汁[1]の歳月を過ごしたものと思われる．

開設後6カ月間の患者は脊椎炎（74例），関節炎（23例），骨折（11例），脱臼（8例），先天畸形（11例），脊椎側後彎（6例），関節外傷（4例）が主であったと言う[89③]．これらの詳細な病名は明らかでないが，他の統計より多かったと記されている脊椎炎とは，脊椎カリエスではないかと考えられる．

安間は大正2（1913）年6月に健康優れず，在任2年余にして部長を退任して[96]名古屋市内で開業した[97]が，大正5（1916）年5月には静養のために帰郷した[98]．

第3節　和田順作第三部長心得

和田順作外科診療医[99]は，安間部長辞任に先立つ大正2（1913）年2月頃から安間と同様に京都医科大学整形外科学教室へ派遣されていた[100]．安間部長退職に伴って同年7月に愛知医学専門学校助教諭，愛知病院外科第三部長心得に命ぜられ，整形外科の診療を引き継いだ[101]．

和田の回顧録[102]によれば，大正3（1914）年4月に学校，病院の施設が，明治6（1873）年以来の中区天王崎（現・栄一丁目）から，中区（現・昭和区）鶴舞町（名古屋大学医学部の現在地）へ移転，新築されたのに伴って，外科の「患部所置場」（1間半に2間半の1室）で始まった外科第三部[89③]も「面目を一新し」，整形外科部長室，診察室，ギプス室，X光線室，暗室，マッサージ室が新設され，安間前部長考案の脊椎伸展器や股関節伸展器が「安置」された．また医員2名，病床15床を擁するに至ったと言う．

しかし大正5（1916）年10月，杉寛一郎第一外科部長[103]が第二・第三外科部長を兼任する[103④]に及んで，和田は「御用済職ヲ免」じられ[104]，名古屋市内（安間医院跡）で開業した[105]．

第4節　内山勝次診察医

内山勝次は静岡県の出身で，明治17（1884）年生まれ[106]，明治41（1908）年に愛知県立医学専門学校を卒業し[107]，翌年11月に愛知病院診察医補，明治43（1911）年2月に診察医に任じられた[108]．

明治43（1910）年2月発行の『中央医学会雑誌』には「内山勝次君　京都医科大学整形外科教室ニ研学セラル」と報じられ[109]，一方『愛知県立医学専門学校校友会雑誌』「通信　動静」欄[110]には，第二回京都帝国大学医科大学医学講習会（明治43年2月1日から4週間開催）[111]に来会したと記されている．

実際，同講習会の参加者名簿[112]には内山勝次の名前が見え，整形外科学（松岡道治教授「整形外科学及其理学的療法一般」，毎火・金曜日午後1–2時，隔週火・金曜日午後2–3時[111]，参加者数30名[113]）と病理学（速水猛教授授「疾病ノ発生及治療」，月曜10–12時，土曜9–10時[111]同22名[113]）を選択，受講している．

この明治43（1910）年2月と言う時期は，明治42（1909）年9月の安間助教諭京大派遣[88]後で，明治44（1912）年3月の愛知病院整形外科分立[94]の前であって，愛知県の辞令による公式な出張ではなかった．従って内山は，医学講習会へ出席する傍ら，整形外科学教室で整形外科の臨床やエックス線技術などを自由に研修し得たものと思われる．

さらに当時，すでに明治34（1901）年から発足した京都衛生検査所主催の医学講習会[114]で示されたように，京都医科大学ないし松岡自身には医学研修に官公立医学校間の身分による障壁はないという見解が，すでに確立されていたものと判断することが出来る．

内山は，その後長野県上田市上田病院外科部長を経て明治45（1911）年に静岡県磐田郡中泉町

図4 三才堂病院外観
土川知香枝先生提供

中町（現・磐田市中泉）の三才堂病院（図4）を継いだ[115]．この病院は，明治25（1892）年に父内山長三[116]が開設した内科，外科を標榜する病院であって，明治42（1909）年の患者数は1157人であったと言う記録が残っている[117]．

大正12（1923）年の記録では，三才堂病院は外科以外に皮膚花柳病科，必（ママ）（泌）尿生殖器科，耳鼻咽喉科，一般科を標榜し，20床の入院設備を持つ病院[118]とされていて，耳鼻咽喉科医[119]も勤務していた．さらに昭和3（1928）年には，外科，花柳病科，X線科を標榜していて[120]，大正末期にはエックス線装置が導入され，技師も雇用されていたようである（私信．土川知香枝先生，平成21年10月31日）．また先生は日本レントゲン協会[121]の創立以来の会員であった．

なおエックス線装置は，第一次世界大戦（大正3〔1914〕～大正7〔1918〕）によってドイツからの輸入が途絶えたために国産化が促進され[122]，大正中期には大学・医学専門学校の附属医院のほか，衛戍病院（陸軍病院），日本赤十字社支部病院，各府県公立病院などへ続々と納入されるに至った[123]．

しかし装置は高価で，例えば島津製作所のジュノーC型（診断，治療用）という器械の大正15（1928）年の価格は2,200円であった[124]．さらに医師の専門的知識・認識の不足や技術者の払底[123]などから私立病院へ導入されることは稀であって，昭和3（1928）年においてエックス線装置を備えていた静岡県下の私立病院は，他に浜松市2病院，沼津市1病院があったに過ぎなかった[125]．

内山が早くからエックス線を導入した理由のひとつに，かつての京大での研修経験があったのではないかと考えられる．

内山は郡医師会長（昭和2〔1927〕年～同12〔1937〕年），産婆学校校長，町会議員などの要職を務め，昭和15（1940）年に祖業を長男長之[126]に譲った[108]．

しかし長之はその後陸軍軍医として満州へ出征し，戦後ソ連へ抑留された（私信．土川先生，平成21年10月30日）ため，内山勝次は昭和19（1944）年の死去まで，脳卒中による身体障害を抱えたまま診療を続けた（私信．土川先生，平成21年10月26日）．

三才堂病院で下腿切断術を受けた隣町の患者は，山内の霊前で手を合わせるために死ぬまで毎年訪ねてきたそうである（私信．土川先生，同上）．

その後三才堂病院は現在地である市内国府台へ移転したが，その際旧病院を明治村へ移築する話もあったと言う（私信．土川先生，同上）．なお現在，三才堂病院は土川光明・知香枝夫妻[127]によって盛業を続けている．

第4章　むすび

今回筆者は，整形外科学を専攻する医師が少なかった中で，創設間もない整形外科学教室へ在籍して松岡教授の薫陶を受け，教室の発展の礎石を築き，さらに京都，新潟，神戸，姫路，徳島，広島の各地で整形外科臨床を実践した諸先輩の事績，業績を明らかにすることが出来た．

さらに，明治時代に官公立医育機関間の垣根を越えて愛知県立医学専門学校からの留学生2名，研修生1名を受け入れ，名古屋・東海地区整形外科の基盤形成とその発展に寄与した松岡教授の英断は，今日改めて評価されるべきであると考える．

稿を終わるにあたり，資料を提供して頂いた愛知赤十字看護大学村地俊二元学長，名古屋市立城西病院植家毅名誉院長，京都市林病院林卓博士（林先生のご令息），同恒村医院恒村麗子院長（恒村先生のご令息夫人），同翠川医院翠川百合子院長（松岡教授のご姪孫），尼崎市イワセ整形外科岩瀬禎章博士（岩瀬先生のご令孫），磐田市三才堂医院土川知香枝先生（内山先生のご令孫）の各位，ならびに名古屋大学附属図書館医学部分館，京都府立医科大学附属図書館，京都大学附属図書館および同大学文書館，広島市立中央図書館，磐田市立中央図書館，名古屋市西区役所まちづくり推進室（押田氏）の職員各位のご好意に深甚の謝意を表する．

注（引用文献*と注記）

＊引用単行本で，編集，著者と発行元が同一の場合や，発行元や書名にその地名を冠している場合は，出版元の地名を省略した．

1）廣谷速人．京都大学整形外科学教室初代教授　松岡道治の事績，業績第一報　京都大学整形外科教室の創立．日本医史学雑誌．2005; 51(3): 385-406.

2）廣谷速人．京都大学整形外科学教室初代教授　松岡道治の事績，業績第二報　松岡道治の学術論文．同上誌．2006; 52(3): 361–394.

3）廣谷速人．京都大学整形外科学教室初代教授　松岡道治の事績，業績第3報　著書について．同上誌．2009; 55(1): 43–55.

4）廣谷速人．京都大学整形外科学教室初代教授　松岡道治の事績，業績第4報　医師および市民への講演活動．同上誌．2010; 56(1): 25–38.

5）各年度の『京都帝国大学一覧』による．なお同書大正2年～同3年版は現存しないので，他の資料から推定した．その意味から，既発表の表①を本稿表1のように訂正する．

①廣谷速人．表1．京大整形外科の教職員一覧（京都大学整形外科学教室の沿革）．京都大学整形外科学教室百周年記念誌編集委員編集兼発行．京都大学整形外科学教室百周年記念誌；2007．p. 21–22.

6）副手とは，明治32（1899）年の医科大学創設に伴って京都帝国大学に設けられた規定①によって定められた身分であって，帝国大学大学院学生や医科大学の卒業生らが志願し，医科大学長もしくは医院長の稟申によって総長が嘱託する身分であって，「其職掌医科大学助手ニ異ナルコト」はないが，無給で在任期間2年が原則であった．

①京都帝国大学編集兼発行．第五　副手規定（第十四章　医科大学）．京都帝国大学一覧　従明治三十二年　至明治三十三年；1900．p. 66–67.

7）医員介補とは「専修生タリシ者又ハ之ト同等以上ノ学力ヲ有スル者」を6カ月を期限として（「必要ニ応じて継続スルコトアルヘシ」）附属医院へ雇い入れられる身分である①．ここで言う専修生（選科生）は高等学校医学部，公立医学校などの卒業生から採用された②．

①京都帝国大学編兼発行．第五　附属医員介補採用内規（第九章　京都医科大学）．京都帝国大学一覧　従明治三十八年　至明治三十九年；1906．p. 209–210．②第六　専修生細則．注6①．p. 67–68.

8）本田六介編著．山崎傳三（兵庫県　神戸市）．日本医籍録　第四版．医事時報社；1928．p. 兵庫県 8.
ここでは京大在籍2年となっている．

9）陸軍一年志願兵①とは，徴兵令②第13条に基づいて，中等学校以上の卒業証書を持つ者で学術試験，身体検査に合格した者に与えられる兵役で，学術，身体試験に合格し在営3年間の費用を前納し無給とすることによって，通常3年の兵役を1年に短縮する制度である．とくに医・歯・薬学，理財・商業学の卒業証書を持つ者は，服役後半は専門を訓練する．なお当時は，満17歳から同28歳までの中等学校以上の在学生は徴兵を猶予されていた．

①浅井恒太郎．陸軍一年志願兵条例．学生必携兵事便覧　訂正再版．東京：盛春堂書店；1901.

p. 24–72. ②内務省総務局文書課編集兼発行．徴兵令　法規類抄　下巻；1900. p. 191–198.

10）山崎傳三郎君（雑報）．愛知県立医学専門学校同窓会雑誌．1905; 16: 160.

「第三師団[①]患者輸送部附として在職」とある．なお「傳三郎」は「傳三」の誤り．

①明治6（1873）年に設置された名古屋鎮台が明治21（1888）年に第三師団となった[ⓐ]．

【ⓐ亀岡泰長．第二節　明治に於ける沿革（第二編　日本帝国陸軍軍制　第一章　日本帝国陸軍歴史）．陸軍．東京：川流堂；1911. p. 70–80.】

11）医学会総会委員役割（第一　開会記事　附庶務，会計報告）．京都医事衛生誌．1907；4（4. 附録　京都医学会第四回総会号）：1.

12）整形外科学教室（参観　京都医科大学及医院）．注11．p. 74–75.

13）日本医事新報社編集兼発行．山崎傳三（日本医師名簿　兵庫県　神戸市　神戸区）．日本医事年鑑；1939. p. 1119.

14）池田和夫編．御年譜．恒村夏山先生偲び草　永遠の光．京都学生光明会；1963. p. 65.

15）日本杏林社編集兼発行．恒村京八（京都市　上京区）．日本杏林要覧　前編　医籍．1909. p. 160.

16）肥後藩の医学校であった再春館（宝暦6〔1756〕年創立）は，明治29（1896）に私立熊本医学校となった．しかし明治37（1904）年に私立熊本医学専門学校となった[①]ので，医学校在校生は同専門学校の別科として卒業した．

①山崎正董．第一節　沿革（第七章　熊本医学専門学校）．肥後医育史．熊本市：鎮西医海時報社；1929. p. 584–601.

17）熊本医科大学編集兼発行．旧私立熊本医学校別科卒業生．熊本医科大学一覧　昭和九年版；1934. p. 157–158.

18）恒村京八（京都府　京都市）．注8．p. 京都府8.

19）恒村京八（日本医師名簿　京都府京都市上京区）．注13．p. 1082.

20）熊野神社（京都市左京区聖護院山王町43）[①]の主神は伊弉冊尊で，熊野権現を，弘仁2（811）年修験道の僧日圓が勧請したとも，永歴元（1160）年に後白河天皇が帝都守護神として勧請したとも言われる．応仁の乱（応仁元〔1467〕年～文明9〔1477〕年）で焼失したが，寛文6（1666）年に再興された．その境域ははじめ西へ鴨川に至る広大なものであった．

①藤田由章（社寺研究会）編集兼発行．郷社熊野神社．京都神社誌　祭神　縁由　祭祀（増補再版）．1936. p. 16.

21）林卓．遺影によせて（臨床グループ・研究グループの紹介　股関節グループの歴史）．注5①．p. 134.

22）第二高等学校編集兼発行．生徒　大学予科第三部第一年（医科）．第二高等学校一覧　自明治三三年至明治三四年；1900. p. 158–160.

23）京都医科大学職員異動（雑報）．京都医事衛生誌．1912; 218: 29–30.

24）主論文は「Klinische und Röntgenologische Untersuchungen von 233 Fällen der angeborenen Hüftverrenkung. Mit 658 Abbildungen」[①]である．教室開設（明治39〔1906〕年6月）から明治44〔1911〕年11月までの間に京大整形外科で経過を追跡し得た233例についての膨大な研究である．ドイツの専門雑誌へ原稿送付中に第一次大戦が勃発し，途中シベリアから送り返された（私信，林卓博士，平成18年4月1日）ため，全文タイプ打ち原稿のまま教授会へ提出された．658枚のエックス線写真あるいはそのスケッチが大型で厚いアルバム数冊に貼ってある．学位審査に当たる教授にこの原稿を届けるために事務員は苦労したと言う逸話が語り継がれている．

副論文は以下の松岡教授と共著のドイツ語論文6編である．

1. Hayashi K, Matsuoka M. Über angeborenen Hochstand der Schulterblätter（ein neuer Fall von doppelseitigem Hochstand）. Deutsche Zeitschrift für Chirurgie. 1912; 113（3・4）: 285–318.
2. Hayashi K, Matsuoka M. Ueber intra partum entstandene Unterschenkelfraktur. Archiv für klinische Chirurgie. 1912; 98（2）: 417–424.
3. Hayashi K, Matsuoka M. Ueber die Erblichkeit der angeborenen Hüftgelenkverrenkung. Zeitschrift für orthopädische Chirurgie einschliesslich der Heilgymnastik und Massage. 1913; 31（3・4）: 400–423.
4. Hayashi K, Matsuoka M. Angeborenen Mißbildungen kombiniert mit der kongenitalen Hüftverrenkung. *ibid*. 1913. 31（3・4）: 369–399.
5. Hayashi K, Matsuoka M. Anatomische und radiologische Untersuchungen der Knochengerüste der kongenital verrenkten Hüftgelenke. *ibid*. 1912; 30（1・2）: 196–226.
6. Hayashi K, Matsuoka M. Bericht über 700 Fälle von Spondylitis tuberculosa. *ibid*. 1912: 30（3・4）: 381–393.

①林喜作．先天性股関節脱臼患者二百三十三例ノ臨床的並ニX線的研究（学位論文）．官報．大正4（1915）年1月28日；745: 538–539.

25）京都医専校講師及校医異動（雑報）．京都医事衛生誌．1914; 244: 15.

26）京大講師解職（雑報）．同上誌．1918; 291: 28.

27）林喜作．先天性股関節脱臼ニ就テ（八百例ヲ基礎トシテ其本態ヲ論ズ）．日本外科学会雑誌．1922; 23: 263–265.

28）林喜作．先天性股関節脱臼ニ就テ（初生児ノ療法）．同上誌．1923; 24: 198–199.

29）林喜作．先天性股関節脱臼．日本整形外科学会雑誌．1927; 2: 13–44, 159.

30）井関九郎．国香七郎，林喜作．批判研究博士人物．東京：発展社出版部．1925．p. 322–323.

31）医事時論社編集兼発行．竹端民之輔（新潟県　北蒲原郡）．日本医籍録．1925．p. 新潟県27.

なお『第四高等学校一覧』（第四高等学校編集兼発行）の「生徒姓名」欄を通覧すると，同級生に島津眞がいる．また同書「自明治三十六年至明三十七年」版」（明治36〔1903〕年発行）までは内藤姓（島根県出身）であったが，同書「自明治四十年　至明治四十一年版」（明治40〔1907〕年発行）から竹端姓（愛知県出身）に変わっていて，さらに本書では出身地が名古屋市となっている．日本医事年鑑の昭和12（1937）年版①にはその名前があるが，同昭和13（1938）年版，同14（1939）年版にはその氏名を見出し得ないので，昭和12年頃死去されたものと考えられる．

①日本医事新報社編集兼発行．竹端民之輔（日本医師名簿　新潟県　北蒲原郡）．日本医事年鑑；1937．p. 958.

32）竹端民之輔（各分科大学卒業生　医学科　医学士（京都医科大学卒業ノ者）明治四十一年一月卒業）．京都帝国大学一覧　従明治四十一年　至明治四十二年；1909．p. 322.

33）島津眞．注31．p. 新潟県31．明治13（1880）年生まれ．明治40（1907）年11月京大卒業①後，京大内科副手②，助手③，和歌山県有田病院勤務を経て，大正元（1912）年に新潟県北蒲原郡五十公野（いじみの）町（現・新発田市五十公野）で開業した．

①島津眞．明治四十年十一月卒業．注32．p. 322.　②島津眞．内科学教室（京都医科大学職員　副手）．注32．p. 63.　③京都帝国大学編集兼発行．島津眞．内科学教室（京都医科大学職員　助手）．京都帝国大学一覧　従明治四十二年　至明治四十三年；1910．p. 69.

34）乾玄治は安政5（1858）年生まれで明治17（1884）年試験合格，住所は新潟県北蒲原郡新発田町字新発田本村と明治42（1909）年の記録①にあるが，大正14（1925）年の記録②にはその名前を見出せない．

①乾玄治（新潟県　北蒲原郡）．注15．p. 566.　②新潟県北蒲原郡．注31．p. 27–31.

35）新発田市豊栄市北蒲原郡医事衛生編集委員会編．その他の病院（第三篇　明治時代の医事衛生　第二章　医制の制定以後　第三節　病院の開設）．新発田市豊栄市北蒲原郡医事衛生史．新発田市豊栄市北蒲原郡医師会；1982．p. 88.

36）新潟県建築士会北蒲原具支部技術部．古い建物の調査の記録　竹端医院調査報告書（その1）および（その2立体図）．http://geocities.jp./takadai1203/kokentiku/takenHOU1.PDF および http://geocities.jp./rakada1203/kokentiku/takeELV2.PFD（平成21年10月26日参照）

37）第三高等学校編集兼発行．和辻龍太郎．第三部医科卒業生（卒業生　明治三十八年七月大学予科卒業生）．第三高等学校一覧　明治三十八年九月起　明治三十九年八月止；1905．p. 148–150.

38）和辻龍太郎（兵庫県　神崎郡）．注8．p. 兵庫県65.

39）和辻龍太郎（日本医師名簿　兵庫県　姫路市）．注13．p. 1123.

40）京都帝国大学編集兼発行．外科学講座（医科大学職員　職員）．京都帝国大学一覧　従明治四十三年　至明治四十四年；1911．p. 70–72.

41）京都帝国大学編集兼発行．整形外科学講座（医科大学職員　職員）．京都帝国大学一覧　従明治四十四年　至明治四十五年；1912．p. 67.

42）藤戸孝純．仁寿山雑記　郷土の医学史．29 和辻家の栄光（その1）．姫路市医師会報．1999; 284: 34–35.

43）藤戸孝純．仁寿山雑記．郷土の医学史．30 和辻家の栄光（その2）．同上誌．1999; 285: 33–34.

44）岩瀬良吾は安政3（1856）年生．明治17（1884）年履歴により医術開業を許可され，徳島県麻植郡学島村学村（現・吉野川市川島町学）①,②で開業した．徳島県が名東（みょうどう）県と呼ばれた時代（明治4〔1871〕年から同13〔1880〕年）③に県の衛生部長役を務めた（私信，岩瀬禎章博士．平成18年11月24日）．

①内務省衛生局編集兼発行．岩瀬良吾（徳島県麻植郡）．日本医籍；1889．p. 322.　②岩瀬良吾（徳島県　麻植郡）．注15．p. 1090.　③徳島県内務部地方課編．沿革（総説）．徳島県誌略．大阪市：黒崎精二；1916．p. 24–50.

45）徳島日々新報社編集兼発行．岩瀬国義．阿波人物鑑：御大典記念；1928．p. 6.（岩瀬禎章博士提供．平成18年11月24日）

46）金沢医学専門学校編集兼発行．明治四十四年九月卒業生（卒業生　金沢医学専門学校　医学科）．金沢医学専門学校一覧　自大正元年　至大正二年．1912．p. 149.

47）京都医科大学職員異動（雑報）．注23．p. 30.

48）京都医科大学職員異動（雑報）．京都医事衛生誌．1913; 232: 39.

49）岩瀬国義（徳島県　徳島市）．注8．p. 徳島県1.

なお，大正2（1913）年12月発行の地元医学雑誌①には「本年九月帰国シ爾来徳島市北佐古町奥田浜ニテ開業セラル」とあり，同年12月現在の同誌掲載の名簿②では徳島市大字北佐古町定普請丁となっている．また大正7（1917）年の徳島市の記録③には岩瀬療病院（北佐古町）として岩瀬国義・良吾の名前が記載されている．

①会員異動．徳島医学雑誌．1913; 71: 54.

②会員名簿．同上誌．1913；73附録会員名簿（大正三年十二月調）：1.

③徳島市役所著作兼発行．衛生（防傷的事業）．徳島市．1917．p. 88–90.

50）岩瀬国義（日本医師名簿　徳島県　徳島市および

麻植郡）．注 13．p. 1256 および 1257.

51）林曄（慶応 2〔1866〕年―昭和 19〔1944〕年）[①,②]は明治 25（1892）年に帝国大学を卒業し，ドイツ留学後明治 31（1898）年に東京市京橋区築地（現・東京都中央区築地）に外科矯正術を標榜して開業した[①,②]．本邦初の整形外科専門開業医である[③]．初代京橋区医師会長，東京府医師会長を歴任したほか，日本外科学会（明治 32〔1899〕年），日本整形外科学会（大正 15〔1826〕年）などの創立に参画した．

①林曄．注 8．p. 東京府（京橋区）99–100．②前田立雄．初代京橋区医師会長林先生．追悼抄．東京都中央区医師会．http://www.chuo-med.jp/siryou/tuitou07.html#-001（平成 20 年 5 月 16 日参照）③蒲原宏．16．整形外科学講座の新設（Ⅰ．日本整形外科学会の創立まで―近代日本整形外科成立前史）．日本整形外科学会 Historian 委員会編．日本整形外科学会 80 年史．日本整形外科学会；2006．p. 23–27.

52）井関九郎．三宅坦．批判研究博士人物．医科続編．東京：発展社出版部．1936．p. 169–170.

53）新入会員諸君．愛知県立医学専門学校同窓会誌．1909; 24: 161–162.

54）本年卒業諸兄の動静．愛知専門学校校友会雑誌．1913; 33: 167–168.

55）愛知県立医学専門学校校友会名簿（大正 3 年 12 月調）．同上誌．1914；34（新築開校記念号）：附録.

56）三宅訒（広島県　広島市）．注 15．p. 948.

57）三宅訒（広島県　広島市）．注 8．p. 広島県 9.

58）京大松岡教授（雑報）．京都医事衛生誌．1913; 237: 31.

59）尼野敬二．大坂便り（通信　会報）．愛知県立医学専門学校校友会雑誌．1917; 43: 81–83.

60）熊谷幸之輔（安政 4〔1857〕～大正 12〔1923〕年）[①,②]は秋田県仙北郡六郷町（現・美郷（みさと）町）出身[①]，明治 14（1881）年東京大学医科大学を卒業し，愛知医学校へ一等教諭（外科学）として赴任した．その 2 年後から大正 5（1916）年までの 33 年間，校長を続けた．

①熊谷孝之輔先生略歴．愛知県立医学専門学校同窓会雑誌．1906；17（熊谷・奈良坂両教諭在職廿五年祝賀会）：1–4．②熊谷幸之輔―名大をひきいた人びと②―（ちょっと名大史　88）．名大トピックス．2009；195：裏表紙.

61）第一高等中学校時代は，松岡[①]は三宅恒[②]の 1 級下であった．

①第一高等中学校編集兼発行．松岡道治（第二十一章　生徒姓名　三部一年）．第一高等中学校一覧　自明治廿四年　至明治廿五年．1892．p. 112．②三宅恒（第二十一章　生徒姓名　三部第二年）．同上書．p. 102.

62）帝国大学編集兼発行．第一年（第十九章　学生及生徒姓名　第三　医科大学々生及生徒）．帝国大学一覧　従明治廿六年　至明治廿七年．1894．p. 305–306.

三宅は前年も 1 年生であった[①]ことから，病気による留年ではないかと考えられる．

①帝国大学編集兼発行．三宅恒．第一年（第十九章　学生及生徒姓名　第三　医科大学々生及生徒）．帝国大学一覧　従明治廿五年　至明治廿六年；1892．p. 304.

63）三宅は同窓会大阪支部で当番理事[①]，幹事[②]，理事[③,④]などを務めた．

①大阪支部通信．鶴天学友会会報．1924; 59・60: 48．②大阪支部通信．同上誌．1929; 70: 106–108．③大阪支部通信．同上誌．1926; 64: 72–73．④第五回大阪神戸聯合学友会大盛況．名大学友会報．1932; 8: 11.

64）主論文は「先天性股関節脱臼ノ骨盤骨ニ就キテノレントゲン像ノ研究」（Hiroshi Miyake. Röntgenologische Studium über die Beckenknochen bei angeborener Verrenkung des Hüftgelenkes．日本外科宝函．1934; 11（2）: 355–469．独文）で，松岡病院 18 年間の 1388 例中 50 例のレントゲン像を追跡，解析したドイツ語論文で，エックス線写真・同スケッチが 210 図添えられている．

副論文は次の 2 編で，いずれも松岡病院の症例による研究である．

1. 三宅坦．下駄履キノタメニ屡々起ル第Ⅴ蹠骨凸起部並ビニ基底部骨折ニ就キテ．日本外科宝函．1934; 11（1）: 214–231.
2. 三宅坦．薦骨ノ腰椎骨化セルレントゲン線所見（Hiroshi Miyake. Röntgenbefunde bei sakraler Lumbalization）．同上誌．1934; 11（2）: 470–476. 独文）．

整形外科学名倉重雄教授は，同年 3 月から 9 月まで欧米へ出張していたが，この出張のことは前年 10 月には教授会で決定されていたという[①]．学位請求論文は斉藤眞第一外科学教授[②]の了解を得た上で提出されたと言われている[52)]が，この時期の一致は偶然であったであろうか．

①名古屋大学医学部（代表　村地俊二）編集兼発行．第 7 章　第二回外遊と名古屋生活．および年譜．名倉重雄伝．1990．p. 93 および p. 243．②斉藤眞（明治 24〔1889〕―昭和 25〔1950〕）[ⓐ]は宮城県出身で大正 4（1915）年に東京帝国大学を卒業し，大正 6（1917）年愛知県立医学専門学校講師兼県立愛知病院外科第二部長心得に任命された．大正 8（1919）年教諭に昇任したが翌年退職，私費で欧州留学，大正 13（1924）年に帰国した．大正 11（1922）年以後，愛知医科大学，名古屋医科大学，名古屋大学医学部の教授（第一外科学講座）を務め，昭和 21（1946）年以降附属医院長を務めていたが，昭和 25（1950）年 1 月急逝した[ⓑ]．

【ⓐ斉藤眞―日本における脳神経外科学のパイオニア―（ちょっと名大史　30）．名大トピッ

クス．2004；137：裏表紙．ⓑ青井東平編集 斉藤附属病院長急逝（第八部 名古屋大学 新制大学発足と田村総長の死）．名古屋大学医学部九十年史．名古屋大学医学部学友会第五十二回学友大会；1961．p. 371.】

65）三宅綾子（兵庫県 武庫郡）．注31①．p. 943.

66）三宅坦（兵庫県 武庫郡）．注31．p. 兵庫県32.

67）医事公論社編集兼発行．三宅綾子（広島県 佐伯郡）．日本医籍録 第十九版；1951．p. 広島県25–26.

専門は外科と記載されているが，大阪の有澤眼科病院へ勤務との経歴も書かれている．同院院長の有澤潤[①]は大阪道修町の生まれで明治40（1907）年東京帝国大学卒業，同大学眼科副手を経て渡欧，大正3（1914）年帰朝後大阪で開業した．病院の所在地は松岡病院に近い．

①長門谷洋二．有澤潤（第一部 戦前の船場の医者 四 大正昭和（戦前）時代 船場の医師たち「船場の医師個人伝」および「付眼科医再掲」）．大阪市東区医師会三十周年記念誌刊行会編．船場の医者：大阪市東区医師会三十周年記念誌．大阪市東区医師会；1982．p. 180–181．および198.

68）会員移動（自昭和十一年十二月 至昭和十二年一月）．名大学友会報．1937; 16: 10.

69）日本臨牀外科学会は外科開業医が「特にプラクティスを研究するために」昭和12（1937）年に創立され[①,②]，三宅坦はその評議員に選出されている[③].

①発会式記事．日本臨牀外科学会雑誌．1937; 1(1): 84．②日本臨牀外科学会発会式議事速記録．注69①．p. 84–88．③日本臨牀外科学会評議員．同上誌．1937；1(5)：前付.

70）三宅の学会発表[①,②,③,④,⑤]ならびに学会誌掲載論文[⑥,⑦]は以下の通りである.

①先天性股関節脱臼「ギプス」固定繃帯除去後ニ来ル患側大腿骨下端部骨折ニ就キテ（第四回中国四国外科集談会．昭和13年11月）．日本外科学会雑誌．1939; 40(3): 583．②鎖骨「カリエス」ノ1例（同上集談会）．同上誌．1939; 40(3): 583．③追加（演題「先天性股関節脱臼130例」への1334例の追加．同上集談会）．同上誌．1939; 40(3): 583．④追加（演題「口蓋破裂手術ノ今昔」への追加．同上集談会）．同上誌．1939; 40(3): 584．⑤追加（「右側咬筋護謨腫ノ一症例」への症例追加．同上集談会）．同上誌．1939; 40(3): 587．⑥鎖骨「カリエス」の1例．日本臨牀外科学会雑誌．1939; 3(4): 219–221．⑦先天性股関節脱臼「ギプス」固定繃帯除去後に来る患側大腿骨下端部骨折に就て．同上誌．1939; 3(8): 422–427.

71）広島市編集兼発行．昭和十六年年度広島市防空計画 別紙第三十号 防空業務ニ従事スヘキ医師，歯科医師，獣医師，薬剤師，看護婦表．広島原爆戦災誌．第五巻 資料編；1971．p. 231–259.

72）会員異動．名大医学部学友会雑報．1941; 1: 4.

73）医学公論社編集兼発行．三宅坦．日本医籍録（西日本版）．第37版；1966．p. 広島県（佐伯郡）69.

74）五日市町誌編集委員会編．（四）原爆被災救護活動と五日市医師（第二編 五日市の人文 八 佐伯郡医師会の設立と活動）．五日市町誌 下巻．五日市町誌編集委員会事務局；1983．p. 138–149.

75）佐伯郡医師会史編集委員会編集兼発行．五日市町（第四章 原爆被災と救護活動 第二節 救護所の開設と患者収容）．佐伯郡医師会史；1970．p. 248–249.

76）昭和二十四年 郡医師会研究会（第五章 新制佐伯郡医師会の発展 第二節 長岡文策会長時代）．同上書．p. 268–270.

77）昭和二十六年 郡医師会研究会（第五章 新制佐伯郡医師会の発展 第三節 沢英堅会長時代）．同上書．p. 274.

78）五日市町誌編集委員会編集兼発行．第5表 町村長在職歴表（旧町村別）．（第二編 五日市の人文 第六章 政治の変遷 第一節 町村制度 四，戦後の五日市）．五日市町誌（中巻）．五日市町誌編集委員会事務局．1979．p. 46.

79）昭和三十五年（第四節 吉田繁満会長時代 佐伯郡医師会創立十五周年記念式典ならびに祝賀会）．注75．p. 315–317.

80）吉田繁満．会長挨拶（佐伯郡医師会報 佐伯郡医師会15周年記念式典）．広島医学．1961; 14(1): 255–257.

81）附録 四 佐伯郡医師会会員名簿（昭和四十五年八月一日現在）注75．p. 602.

82）名古屋大学医学部整形外科学教室編集兼発行．村地俊二．I 沿革と歴史（教室の歴史）．開講50周年記念教室業績集 1967–1976．1977．p. 343–362.

83）村地俊二．教室の沿革．名古屋大学医学部整形外科学教室開講50周年記念式典における講演．（私信．村地俊二元日本赤十字豊田看護大学学長，平成成17年2月4日）

84）村地俊二．名古屋大学整形外科学教室の歴史（前編）．名整会会誌．1997; 20: 10–14.

85）外科第三部（整形外科）開設．（第四節 愛知県立医学専門学校 経営機構の充実）．注64b．p. 115.

86）名古屋大学医学部名古屋大学史（医学部）編集委員会編．整形外科学教室〔前史〕（第2部 講座史，部局史，部史）．稿本名古屋大学医学部百拾五年史．名古屋大学医学部．1988．p. 241–242.

87）安間賢敏[①]は静岡県長上（たがかみ）郡和田村安間（あんま）新田（現・浜松市東区安間町）の出身[②]で，明治33（1900）年6月に愛知医学校を卒業[③]し，県立愛知病院外科部へ籍を置いた[④]が，同年11月に海軍軍医学校へ進んだ[⑤]．1年後の卒業に際しては成績優等により皇上陛下より銀側時計の恩賞を賜った[⑥]．海軍少軍医[⑦]として横須賀海兵団に属した[⑧,⑨]．その後母校へ復帰して外科

診察医を命じられ[10]，愛知医学校外科二部助手であった明治35（1902）年には小川部長[11]の欧州留学のために部長心得に任ぜられ，外科各論を担当した[12]．明治39（1906）年6月には外科助教諭として記載されている[13]．なお安間は明治40（1907）年に『手術学』を発行している[14]．安間は教諭就任後，同校校友会の副理事長[15]に選出され，また中央医学会の機関誌『中央医学会雑誌』の編輯者を務めるなど，同窓会の重鎮であったとことは，別の一面を表わすものと言えよう．

①村地[82,83,84]は“安間”に“やすま”とルビを振っているが，愛知県立医学専門学校々友会員名簿[55]には「ア」の欄に記載されているので，上述の出身地をも考慮して“あんま”と呼ぶのが正しい．②会員姓名簿．中央医学会雑誌．1903; 55（附録）: 11．③医科卒業（雑報）．明治33年6月．中央医学会雑誌．1900; 35: 62–63．④新入会員（本会記事）．注87④．p. 71．⑤会員動静（本会記事）．中央医学会雑誌．1900; 38: 54–55．⑥動静録．愛知医学校同窓会雑誌．1902; 9: 77．⑦少軍医は兵科の少尉に相当する．⑧転居（本会記事）．中央医学会雑誌．1902; 45: 79．⑨会員動静．注87⑨．p. 78．「横須賀海兵団附兼鎮北ⓐ乗組」という記事が見える．⑩会員動静録．愛知県立医学専門学校同窓会雑誌．1904; 13: 152．⑪小川三之助は文久元（1861）年生まれで，明治19（1886）年に帝国大学医学科を卒業しⓑ，埼玉県病院長ⓒを経て，明治28（1895）年から愛知医学校（のち愛知県立医学専門学校）教諭として外科学，皮膚科学，繃帯学を講じ，愛知県立病院外科第二部長に任ぜられたⓓ．大正4〔1915〕年に病気静養のため辞任，帰郷（千葉県君津郡根形村飯富〔現・袖ヶ浦市飯富〕）ⓔ，翌年10月死去したⓕ．⑫知剣抜．安間賢敏君．動静録（雑報）．愛知県立医学専門学校同窓会雑誌．1906; 17: 143．⑬雑録　愛知県立医学専門学校愛知病院一覧（明治39年6月1日現在）．中央医学会雑誌．1906; 68: 80．⑭安間賢敏．手術学　完．名古屋：長谷川活版所；1907（図5）．本書は21.9 cm×14.9 cm，155頁の小冊子である．発行者の長谷川活版所は当時『愛知県立医学専門学校校友会雑誌』や『中央医学会雑誌』を印刷していたが，両誌に本書の広告はない．安間が手術学同実習を講じたことⓖ，欄外随所に書き込みがあることなどを考慮すると，当時の生徒に必須の講義録であったと考えられる．なお県立愛知医学専門学校は大正3（1914）年当時すでに本書を所蔵しておらずⓗ，また現在の名古屋大学附属図書館医学部分館や国会図書館に所蔵の記録はない．⑮副理事長（会報）．校友会役員．愛知県立医学専門学校同窓会雑誌．1912; 30: 159．

【ⓐ鎮北（ちんぼく）とは，明治12（1978）年に英国で建造

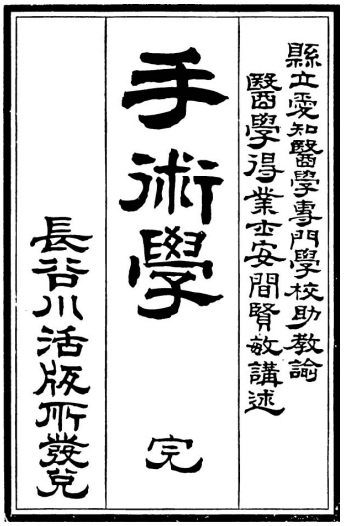

図5　安間賢敏著『手術書　完』[87⑭]
（筆者蔵）

され，明治27（1895）年に捕獲された清国海軍軍艦（排水量420トン）で，二等砲艦に編入されたが，明治39（1895）年に廃艦になった（福井静夫．写真日本海軍全艦艇史　上巻．東京；ベストセラーズ．1994．p. 439．および阿部安雄．写真日本海軍全艦艇史　資料編．1994．p. 48．ⓑ小関恒雄．明治中期東京大学医学部卒業生動静一覧．醫譚．2000; 76: 1–21．ⓒ沼野武照編輯兼発行．埼玉県職員録　明治19年10月改正．1886; 194．ⓓ旧職員一覧表．注63②．p. 504–505．ⓔ人事および会員転居（雑報）．中央医学会雑誌．1915; 121: 69–70．ⓕ雑報（人事）．中央医学会雑誌．1916; 28・129: 70–71．ⓖ明治40（1907）年の「愛知県立医学専門学校愛知病院一覧」（中央医学会雑誌．1907; 74: 103–107.）によれば，安間は繃帯学，全実習，手術学及実習を担当している．ⓗ図書部沿革史梗概　図書及雑誌寄贈者芳名並に校友会図書目録　図書雑誌寄贈芳名録．および第十五，外科之部．注55．p. 198–200．および206–207.】

88）安間賢敏（通信動静　官報公報）．愛知県立医学専門学校校友会雑誌．1910; 25: 161．

89）始め「約二ヶ月ノ予定」とされていた[①,②]が，実際は9月から12月までの約3カ月間であった[③]．なお村地[82,83,84]の1年間留学と言う記述に従った拙稿[④]は誤りであり，ここに訂正する．

①安間賢敏君（会員動静）．中央医学会雑誌．1909; 88: 55．②松井芳葉．京都より（通信動静）．注88．p. 146–149．③安間賢敏．外科第三部沿革（愛知県立医学専門学校各教室沿革及其設備之梗概　学校ノ部　外科第三部〔整形外科〕教室）．注55．

p. 74–75. ④廣谷速人．京都大学整形外科学教室の沿革（教室の沿革），および初期三代の教授（学術講演会・祝賀会．第一部　パネルデイスカッション「京大整形外科の百年」）．注5①．p. 13–23. および435–443.

90）中央医学会とは，明治27（1894）年発足の愛知医学会[①]が明治30（1897）年に名称を変更した医学会であって[②]，愛知県立医学専門学校卒業生を会員としている．それぞれ愛知医学会雑誌，中央医学会雑誌を発行した．

①愛知医学会設立之旨意（本会記事）．愛知医学会雑誌．1894; 1: 44–45. ②評議員会記要（本会記事）．中央医学会雑誌．1897; 17: 52–54.

91）京大留学後，外科第三部開設（明治44（1911）年4月）までの学会発表は以下の通りである[①,②,③,④]．

①標本供覧（レントゲン写真）（第151回例会，明治43年6月）．中央医学会雑誌．1910; 92・93・94: 104. ②標本供覧（エッキス光線写真二葉）（第153例会，明治43年10月）．同上誌．1910; 92・93・94: 107. ③X光線写真ノ供覧（本会記事　総会演題摘要，明治43年11月同上誌．1910; 95: 57. ④二三ノ実験ニツイテ（X光線写真ノ供覧）（第156回例会，明治44年2月）．同上誌．1911; 96: 98.

92）細江謙三．三台あったX線装置．および，三台あったX線装置（第五章　愛知病院の設備と臨床）．遠き日々より―放射線とともに歩んだ60年．東京：医療科学社；2002. p. 71–72. および73–74.

93）会員動静．注91③．p. 82.

94）愛知病院　整形外科分立（雑報）．中央医学会雑誌．1911; 97: 82–83.

95）安間賢敏．六ヶ月間ノ整形外科　附脊椎椎骨瘍（中央医学会第18回総会，明治44年11月）．県立愛知医学専門学校校友会雑誌．1911; 29: 133–134.

96）一九一三年（大正二年）（名古屋大学医学部年表）注64b．p. 54.

97）安間賢敏君（雑報　会員動静）．中央医学会雑誌．1913; 111: 108.

「専心開業」の地は西区仲之町[①]（現・中区栄一丁目．私信．名古屋市西区役所まちづくり推進室，平成20年3月12日．〔名古屋市計画局編集．なごやの町名．1992.〕）であった．

①安間賢敏（会員名簿）．中央医学会雑誌．1914; 118: 附録2.

98）安間賢敏氏（医人）．関西医界時報．1916; 52: 24.

99）和田順作は明治11（1878）年11月生まれ[①]．静岡県富士郡田子浦村（現・富士市田子）の出身[②]で，明治42（1909）年3月に愛知県立医学専門学校を卒業[③]し，病理学教室に一時在籍した[④]が，同年11月に愛知病院診察医補[⑤]，翌年2月に診察医[⑥]に任命された．

①和田順作（愛知県　名古屋市）．注8．p. 愛知県7. ②新入会員姓名．愛知県立医学専門学校同窓会雑誌．1904; 14: 200. ③明治四十二年三月卒業生諸君（動静　通信）．同上誌．1909; 24: 158. ④桑報 明治四十二年三月卒業生動静（通信動静）．注99③．p. 160. ⑤和田順作（通信動静　官報公報）．注88．p. 162. ⑥叙任及辞令．愛知県立医学専門学校校友会雑誌．1912; 30: 156.

100）大正2（1913）年2月発行の『中央医学会雑誌』[①]に「整形外科研究ノ為メ京都大学整形外科教室ヘ留学ヲ命ゼラレタリ」とあり，同年7月の校友会雑誌に「京都大学整形外科に研究中の氏は近々帰名本病院同上科に勤務せらるる由」との記述[②]があるので，京大滞在は安間と同様に3～4カ月であったと思われる．

①和田順作君．会員動静．中央医学会雑誌．1913; 108: 44. ②動静録．愛知医学専門学校校友会雑誌．1913; 32: 136.

101）和田順作氏（雑報　会員動静）．注97．p. 108.

102）和田順作．整形外科設備の概要（愛知県立医学専門学校各科教室沿革及其設備之梗概 学校ノ部　外科第三部（整形外科）教室）．注55．p. 75–76.

103）杉寛一郎は愛媛県出身で，明治36（1903）年帝国大学卒業[①,②]後医科大学副手，助手を経て明治38（1905）年に清国へ赴任した[③]のちオーストリアへ私費留学して大正2（1913）年に帰国，青森県立病院副院長，同院長を経て，大正4（1915）年6月に小川教諭[87⑪]の後任として着任して愛知病院第一外科部長に任ぜられた[①]．大正5（1916）年に第二・第三外科部長を兼任[④]，同6（1917）年から副院長[⑤]，同12（1922）年から愛知医科大学学長代理[⑥]を務めたが，同13（1924）年に病死した[⑦]．

①杉博士を迎ふ（雑報）．愛知県立医学専門学校校友会雑誌．1915; 36: 98. ②杉寛一郎博士卒去（雑報）．愛知医学会雑誌．1924; 31(2): 505–506. ③同仁会[ⓐ]経営の武昌医院[ⓑ]・陸軍省小学堂[ⓒ]の教習技師，あるいは清国湖北省陸軍々医学校教授[103②]を務めた．④杉寛一郎（叙任及辞令）．愛知県立医学専門学校校友会雑誌．1916; 40: 80. ⑤一九一七年（大正六年）（名古屋大学医学部年表）注64b．p. 58–59. ⑥大学長事務代理（旧職員一覧表　愛知医科大学）注64b．p. 508.

【ⓐ同仁会とは「支那朝鮮その他亜細亜諸国に日本の医学，薬学などの技術を普及して，住民の健康を保護し病苦を救済することを目的」に明治35（1902）年に設立された財団法人である（小野得一郎編．本会の創立〔第1編　沿革概論第1章　本会の創立〔第1期　全般〕）．同仁会二十年史．同仁会本部；1924. p. 2–4. ⓑ医師其他派遣　支那．同仁会二十年史（注103a）．p. 53–54. ⓒ在湖北日本教習姓名（学事）．東亜同文会報告．1908; 98: 40.】

104）和田順作（叙任及辞令）．注 103 ④．p. 80.

105）和田順作外科第三部長心得は職を辞し，「仲ノ町安間医院ノ跡ヲ継イデ」[①]あるいは「譲り受けて」[②]開業した．

①和田順作君（会員動静）．注 103 ④．p. 76．②和田順作氏（医人）．関西医界時報．1916; 57: 34.

106）日本医事評論社編集兼発行．内山勝次（静岡県磐田郡）．日本医籍録　第十七版．1942．p. 静岡県 40.

107）新卒業生諸君（動静録）．愛知県立医学専門学校同窓会雑誌．1908; 22: 102.

108）内山勝次．官報公報（通信動静）．注 88．p. 162.
106 新卒業生諸君（動静録）．愛知県立医学専門学校同窓会雑誌．1908．内山勝次．官注 88．p. 162.

109）内山勝次君（会員動静）．中央医学会雑誌．1909; 90: 83.

110）芳葉生．京都より．愛知県立医学専門学校校友会雑誌．1910; 26: 110–112.

111）京都医科大学第二回医学講習会（雑報）．京都医事衛生誌．1909; 189: 26.

開講科目は眼科，皮膚病黴毒科，衛生学科，整形外科，病理科，小児科，精神病科であった．

112）京都医科大学第二回医学講習科（雑報）．同上誌．1910; 192: 40–41.

113）京都医科大学第二回医学講習会（雑報）．同上誌．1910; 191: 22–23.

114）廣谷速人．二〇世紀初頭の京都衛生検査所医学講習会について．腎譚．2009；復刊 90（通巻 107）: 5810（22）–5822（34）.

115）内山勝次（静岡県　磐田郡）．注 8．p. 静岡県 11.

116）内山長三は文久元（1861）年生まれ[①,②]，明治 20（1887）年に医術開業試験に合格[③]，静岡県磐田郡中泉村（現・磐田市中泉西町）で開業，明治 23（1890）年に中泉町中町へ移転して三才堂病院と称した[②]．明治 36（1903）年から同 40（1907）年まで静岡県会議員を務め，明治 42（1909）年から大正 2（1913）年まで磐田郡医師会長を務めた[③]．なお明治 37（1904）年には社会主義運動家と会って「貧家の子供には皮癬病が非常に多い」と校医の立場で語ったとされている[①]．

①近代日本社会運動史人物大事典編集委員会編．内山長三．近代日本社会運動史人物大事典．東京：日外アソシエーツ．1997．p. 501–502．②内山長三（静岡県　磐田郡）．注 15．p. 709．③静岡県医師会編集兼発行．4. 歴代会長・副会長（第三節　郡市医師会の活動　16. 磐田医師会　1. 磐田医師会の沿革と変遷）．静岡県医師会二十年史．1975．p. 785–786.

117）土屋重朗．表 2-7．各病院の患者数（第 3 章　明治後期　第 2 項　病院の患者数）．静岡県医療衛生史．静岡市：吉見書店．1978．p. 118.

118）静岡県磐田郡中泉町梅原村組合役場編集兼発行．病院（第十五章　衛生　第五節　医師・薬剤師・産婆・鍼治業・衛生業者〔各年度現在〕）中泉町沿革誌．1923（郷土史シリーズ　第 2 集　中泉町誌〔復刻版〕．磐田市：遠州文化センター．1985）．p. 235.

119）鈴木知明（静岡県　磐田郡）．注 8．p. 静岡県 12.
耳咽科　三才堂病院．明治 23（1890）年生まれ，福島県出身．大正 4（1915）年医術開業試験に及第．

120）内山勝次（静岡県　磐田郡）．注 8．p. 静岡県 11.

121）日本レントゲン協会々員名簿．蛍光．1927; 1（2）: 附録 4.

瀬木嘉一は，大正 12（1923）年 2 月以来にエックス線関係の医師，技術者とともに蛍光会と言う会合を年 1 回開催していたが，大正 14（1925）年それを拡大して日本レントゲン協会を設立し，昭和 2（1927）年から雑誌『蛍光』を発行した[①,②]．本会は昭和 18（1943）年に日本放射線技術学会へ発展した[②]．瀬川（三重県出身．明治 24〔1891〕年―昭和 49〔1974〕年）[③,④]は，大正 4（1914）年に愛知県立医学専門学校を卒業，レントゲン医学に興味を持ち，大正 11（1921）年から同 14（1925）年まで伊藤弘（ひろむ）教授の下で京大整形外科レントゲン室主任を務める傍ら病理学教室（藤浪鑑教授）で研究して大正 14 年学位を取得，わが国初のレントゲン科専門医院を東京に開業した．

①日本レントゲン協会幹事一同．経歴及び趣意書
日本レントゲン協会経歴及び趣意書．蛍光．1927; 1（1）: 前付 1–2．②網川高美．放射線技師界の恩人瀬木嘉一先生．志賀達雄，山下久雄，増沢武弘編．成楽斎―瀬木嘉一先生　思い出の文集．東京都：瀬木百合．1984．p. 前付．③瀬木嘉一博士の略歴．注 121 ①．p. 東京都：瀬木百合．1984．④廣谷速人．京大整形外科伊藤弘教授の門下生たち．腎譚．2008；復刊 88（通巻 105）: 5552（86）–5570（104）.

122）加藤芳郎．2.1.6. 国産装置普及時代（1916〔大正 5〕年～1920〔同 11〕年）（2. X 線装置・X 線管および附属品）．日本放射線技術学会技術史編纂委員会編．日本放射線技術史．京都：日本放射線技術学会；1989．p. 68–73.

123）藤浪剛一．我国に於けるレントゲン学進歩の状態．医海時報．1934; 1332: 1618.

大正初年には全国各官公私立病院のレントゲン装置は百台未満であったが，同 7 年の終わりには 450 台の多きに達しているものの「医師もレントゲン医学の修養もなく，漫然之に当り藪から棒の芸当」である場合が多いと，藤浪は本論文で嘆いている．

124）後藤五郎編．機械及び設備（大正 15 年）．日本放射線医学史考．明治大正篇．東京：日本放射線学会；1960．p. 298–300.

125）静岡県．注 8．p. 静岡県 1–37.

126）内山長之（静岡県　磐田郡）．注 106．静岡県 40.
明治 42（1909）年生まれ，昭和 12（1937）年新潟医

大卒．陸軍軍医少尉．昭和48（1973）年に死去した（私信．土川，平成21年10月25日）．
127）保険医療調査会編纂．土川光明，土川知香枝（静岡県一磐田市）．医籍総覧 第62版．東京：医事公論社．1989．p. 静岡71.

Prof. Michiharu Matsuoka, Founder of the Department of Orthopaedic Surgery at Kyoto University and His Achievements in Orthopaedic Surgery in the Meiji Era of Japan

(Part 5, Faculty Members and Training of Doctors from Nagoya)

Hayato HIROTANI

Kyoto City

During the years when Dr. M. Matsuoka was professor of the Department of 0rthopaedic Surgery, Kyoto Medical School, Kyoto Imperial University (June, 1907–January, 1914), seven doctors worked as his faculty members and founded the base of the current development and reputation of the Department. After resignation from their academic positions, they served in orthopaedic practice in several areas in Japan where orthopaedic surgery was not well recognized. In addition, Prof. Matsuoka trained three doctors from the Aichi Prefectural Medical College (School of Medicine, Nagoya University) in the orthopaedic practice, including x-ray technique and they contributed to the development of orthopaedic surgery in the areas of Nagoya city and Tokai. Backgrounds and achievements of these ten doctors are described.

Key words: Medical history, Prof. Michiharu Matsuoka, Faculty members of Prof. Matsuoka, Visiting trainees of Prof. Prof. Matsuoka